

視点のあり方とテンス形式

——二葉亭四迷「あひゞき」「めぐりあひ」における動詞「見える」をめぐって——

深澤 愛

一 問題の所在

明治二一（一八八八）年、二葉亭四迷はツルゲーネフの翻訳作品である「あひゞき」「めぐりあひ」を、『国民之友』『都の花』誌上に発表した。周知のように、これら初稿の発表から八年を経た明治二九年に、春陽堂刊『かた恋』所収の一編としてそれぞれの改稿が発表されている（「めぐりあひ」は「奇遇」と題を変えている）。

「あひゞき」「めぐりあひ」ともに、作中人物「自分」が語るという体裁をとっているが、その文章（初稿の文章）について、杉山（一九七九）は次のように述べ

ている。

（成島柳北『航薇日記』など、「二葉亭の翻訳以前の自然描写」では：引用者注）譬喩によって表現される山々はたんに並立的であり、そこには一つの視点から見られたパースペクティブというものがない。視点というものが問題になっていない。それに対して『めぐりあひ』の右に続く文章は作中人物の視線の移動を物語っている。

このようにして、『あひゞき』『めぐりあひ』の文章があたえたショックというものは、つづめていえば、そこには作中人物の位置、あるいは描写

の位置、というものが意識され、問題にされていくということであると思う。(二三五—六頁)

「視点というものが問題になっていない」それまでの自然描写に対して、「作中人物の視線の移動を物語」るような「あひゞき」「めぐりあひ」の描写が当時の読者たちに「ショック」を与えたと評されているのである。

さて、初稿と改稿の表現を見比べたとき、次のように、同じ動詞であっても語形が変更されない場合と変更される場合とがある。(1)(2)に挙げたのは、動詞「見える」の例である(以下、aには初稿の文章を、bには改稿の文章を挙げる。傍線は全て引用者による)。

- (1) a. 品よく、拍子を取て、鞍の上に踊りながら行くのが見えた(めぐりあひ)
b. 品よく拍子を取つて鞍の上に躍りながら行くのが見えた(奇遇)
- (2) a. 目前には灌木が生へ弘ツてゐて、其向には白楊の林が見えた(めぐりあひ)
b. 目の前には灌木が生え拡がつてゐて、其彼方には白楊の森が見える(奇遇)

(1)のように初稿で「見えた」だった部分が改稿でもそのままの場合もあれば、一方で(2)のように初稿「見えた」から改稿「見える」へ変更されている場合もある。

杉山の指摘するように、「作中人物の視線の移動を物語」る文章が当時驚きを以て迎えられたのだとすれば、作中人物が自らの視線の先にあるものを知覚していることを表す動詞「見える」にテンス形式の変更が加えられていることは重要である。

こうした変更は、四迷が改稿を成すにあたってロシア語原文を見直した結果、初稿における誤訳が訂正されただけなのだろうか。ロシア語原文と四迷訳とを対比させた先行論文を見る限り、初稿での(多数の)間違いを正したのが改稿である、とは考えられない。

例えば、佐藤(一九九五)は、「あひゞき」初稿と改稿の訳語を比較すると、改稿の方が原文に忠実な場合もあれば、初稿の方がむしろ優れている場合もあり、また、「めぐりあひ」においても初稿での明らかな誤りが改稿で正されている箇所もあるものの、改稿の方に

むしろ「簡単な誤訳が散見される」という(三七九—三八四、三九一—四頁)。また、コックリル(二〇〇九)は、「奇遇」では「『めぐりあひ』に見られる生真面目なほどの原文へのこだわりが殆ど見られず、随意に訳している」にもかかわらず、この改稿が依然として「原文に忠実な「逐語訳」であり続けたと、研究者の多くが証言している」ことを重視する(二〇頁)。初稿と改稿のどちらがより原文に忠実なのは、必ずしも統一された見解が得られているわけではない。むしろ、こうした研究を見る限り、初稿、改稿それぞれに原文への忠実さや正確さを持つていとすら考えられる。

とするならば、改稿について、佐藤が「語学的正確さよりも日本語の滑らかさに重点をおいた」(三九一—二頁)、コックリルが「一読して『奇遇』の文章の方が日本語としてこなれていることが読み取れる」(一二頁)と述べている点も注目されるべきである。初稿、改稿ともにそれぞれ原文への忠実さを持ち合わせているのなら、それでもなお改稿が日本語として「滑らか」で「こなれている」ということは、ロシア語の訳文と

してだけではなく(あるいはそれ以上に)、日本語としても添削されたと考えられるからである。

こうした点を念頭におき、本稿は、改稿の文章は、あくまで日本語の文章として変更されたものという立場を取る。

本稿でまず明らかにしたいのは、文末³における動詞「見えた／見える」について、改稿においてもテンス形式が変更されない場合(①のパターン)と改稿においてテンス形式が変更された場合(②のパターン)との違いである。主に二節、三節で分析する。加えて、四節において「見えた／見える」以外の語句が「見えた／見える」へ変更された例の分析を行う。その上で、五節において、「見えた／見える」に関するテンス形式の保持や変更が、作中人物の視点のあり方といかなる関係にあるのかを考察する。

「作中人物の位置」が「意識され、問題にされ」た両作品において、初稿から改稿へのテンス形式の保持と変更が意味するところは何なのか。その一端を明らかにすることが本稿の目的である。

二 「見えた」か「見える」か

初稿から改稿へのテンス形式の保持あるいは改変は、どのような条件下で行われたのか。前節で挙げた例を観察して、本稿での見通しを得たい。(3)(4)は、前節に挙げた(1)(2)を前文と併せて再掲したものである。どちらも「めぐりあひ」「奇遇」の例である。

(3)から見てみよう。語り手でもある「自分」が、馬に乗った「婦人(女)」とその連れの男に道端で出会った場面である。

(3) a. 例の婦人は身震をした、(中略)そして駈出した。男もまた直ちに乗つてゐた驪馬に馬刺輪を加へ、駈出したが、自分が其道筋を林端へと出たところには、最う兩人共野を隔て、黄くかすむ遠方で、品よく、拍子を取て、鞍の上に踊りながら行くのが見えた——(めぐりあひ)

b. 女は愕然として、(中略)逸散に駈出す。男も直ぐに乗つてゐた驪馬に馬刺輪を加へ、駈出したが、それから少し経つて自分が其道を

林端へ出た時には、二人は既に野を乗切つて、黄ろく霞む遠方で、品よく拍子を取つて鞍の上に踊りながら行くのが見えた——(奇遇)

語り手は「婦人(女)」の姿を目にするものの、彼女がすぐに駆け去ってしまったため、その姿は語り手の視界から消え失せる。そして語り手が道を歩いて林の外れに出たとき、再び彼女の姿が遠くに「見えた」。「自分が其道筋を林端へと出たところには」とあることからも分かるように、婦人とひとたび邂逅して再びその姿を目にするまでには間がある。描かれる事態は継起的に展開しており、それに伴い語り手の視界に入るものも変化していることが見て取れる。

(4)は、「露西亞の片田舎」の屋敷で見かけた女性と、かつてイタリアで見た女性とが同一人物だと気付いた語り手が、真相を確かめたくて屋敷の周辺をうろつく場面である。

(4) a. 恐らく、莊館ではまだ寐てゐるで有らう……それに今頃家の周囲を徘徊しては、たゞ徒に人の疑ひを惹くといふもの、且目前に

は灌木が生へ弘ひろツてゐて、其向そのむかひには白楊はくやうの林はやしが見えた……我ながら感心な事には、かう心頭こころにかゝる事の有あにも拘あらず、尚未だに遊獵ゆうりやくをしたいといふ貴たうとい念ねんは全く消けぎりはしなかつた。「事に寄よれば——と思おもつた——稚鳥わかどりに出逢でかかも知れん、——其うちには時刻が移うつる」。そこで灌木の間へはいつた。(めぐりありひ)

b. といふものは、恐らく邸やしやでは未だ眠あてゐるであらうし……それに今頃いまごろからその辺あたりを徘徊うろつては、徒いたづらに人の疑ぎを惹ひくといふものである。その上うへ目の前まへには灌木こぶきが生え抜ぬがつてゐて、其彼方ひかたには白楊はくやうの森もりが見える……：我ながら感心な事には斯かう心に懸かる事があつても、獵しを為したいといふ貴たうとい気きは未だ失あせせずてはゐなかつた。「ひよつとすると、稚鳥わかどりに出会ふつても知れん——その内うちには時刻も移うつらう。」そこで灌木の間へ入いつた。(奇遇)

初稿、改稿いづれも描かれる出来事は同じである。

まず、語り手の目には、目前の「灌木」とその向こうにある「白楊の林」が映っている。続けてその林で獵りをしたいという思いが描かれ、「そこで灌木の間へはいつた」と続く。つまり、語り手はずつと灌木や林のある方向を見つめたままなのである。(3)との違いは、語り手がひとところを見つめ、語り手の視線を通して描かれるものが大きく転換しないという点にある。

このように見比べると、初稿「見えた」のテンス形式が改稿で保持されるか改変されるかは、語り手「自分」の視界の転換の有無が条件となつていふという仮説が成り立つ。

次節では、文末で対応している「見えた／見える」の例を取り上げ、仮説の検証を行なう。初稿・改稿とも同じく動詞「見える」を用いている箇所箇所の数は(3)(4)も含めて、次のとおりである。

初稿「見えた」	改稿「見えた」	……二例
初稿「見えた」	改稿「見える」	……三例
初稿「見える」	改稿「見える」	……一例

三 視界の転換の有無とテンス形式

初稿の「見えた」が改稿でもそのまま「見えた」となっているのは、先に挙げた(3)の他に、次の(5)の例がある。(5)は(3)に続く部分で、「婦人」の姿が見えなくなつて茫然としていた語り手が、少し経つて「婦人」の顔を思いだそうとする場面である。

- (5) a. 面貌を見識つてゐればあるほど、浮びにくく、其印象が判然しない。憶出せても目に見えない……自分の顔などは到底想像しられないもので……瑣末な一局部は明亮にわかるが、全体が成立たない。そこで自分は坐つて、目を閉ぢた……スルト直様例の婦人も、其同遊の男子も、人々の乗つてゐた馬も何も角も悉く見えた……(めぐりあひ)
- b. 面相を見識つてゐれば居るほど、浮び難くて、其印象が判然しない。憶出せても目に見えない……自分の顔などは到底も想像せられないもので、細い局部は明亮するが、全体が成立たない。そこで自分は坐つて目を閉つた

——すると直と例の女も、同伴の男も、その乗つてゐた馬も、何も彼も全然見えた……(奇遇)

語り手は、一端目を閉じる。すると、「何も角も悉く見えた」のである。初稿・改稿とも接続詞「そこで」「スルト」によつて文がつけなげられており、「見えた」に至るまでの事態が継起的に展開している点は(3)と同様である。その展開に伴つて、語り手の視界に映るものは転換していく。視界の転換はここでも観察できるのである。

一方、(4)と同じく、初稿の「見えた」が改稿で「見える」と改変されているのが(6)(7)である。

(6)は「あひゞき」の例である。語り手が林の中に初めて少女の姿を認めた場面で、語り手の目に映る娘の様子が詳しく描写されている。

- (6) a. 眼ざしは分らなかつた、——始終下目のみ使つてゐたからで、シカシその代り秀でた細眉と長ひ睫毛とは明かに見られた。睫毛はうるんでゐて、旁々の頬にも亦蒼ざめた唇へか

けて、涙の伝つた痕が夕日にはえて、アリく
と見えた。(あひゞき)

b. 伏目になつて居たから、眼は見えなかつた
が、その代り秀でた細い眉と長い睫毛は判然
見えた。睫毛は濡んでゐて、片々の頬にも蒼
ざめた唇へ掛けて涙の伝つた痕が夕日を受け
てきら／＼と見える。(あひゞき)

林の中に人の姿を認め、「眸子を定めて能く見れば、そ
れは農夫の娘らしい少女であつた」と気付いてから、
語り手は、少女の「物思はし氣に頭を垂れ」た姿、「膝
に落」された手、その手に持った「草花の束ね」、「し
とやかに着倣」された服、「美しい鶉色」の頭髮、と、
少女の姿を描いていく。そして、(6)以降で顔や表情を
細かく描写する。(6)は、いわば全体像からクローズ
アップ像に切り替わつた始めの部分にあたる。

クローズアップして始めのうちの(6)では、語り手は
終始少女の目の周辺に注目している。「細眉」「睫毛」
〔頬から唇にかけて〕涙の伝つた痕」と焦点は少しず
つ移動するものの、この部分で語り手の視界が切り替

わっているわけではない。

(7)は「めぐりあひ」の例である。ふと耳に入つてき
た婦人の声が、二年前にイタリアで聞いた婦人のも
のと同じだと気付いた語り手が、イタリアでのことを
語り始めた部分である。初稿の「見えた」が改稿では
「見える」となっている。

(7) a. 夜にはもう先刻入つたので、——莊麗な夜

に、南国の露西亞のやうに静かで、物哀れに
鬱陶敷いのではない、どうして(50)? 仕
合せな妙齡の婦人のやうに、総て気味の佳い、
きらびやかな、うつくしい、月は怪まれる
ほどに皎々と照りわたつてゐた。あざやかな
大粒な星は黒ずむだ蒼空にきらつき切つてゐ
た。くろ／＼とした物の影は黄はむまでに照ら
された地面に劃然立ツて見えた。(めぐりあ
ひ)

b. 其時は日が暮れてから最う余程経つてゐた
が、南国の事であるから、花やかなもので、
露西亞の夜のやうに寂然として悲しくなるの

とは訳が違ふ。なかくそんなものでない！

人で云つたら、先づ若い果報な女といふ所で、
鮮かで、綺羅びやかで、美しいものだ。月は
おそろしく皎かで、煌々する大粒な星が青黒
い空に紛々と覆れて、黄ばむ程月に照された
地面に物の影が黒々と際立つて見える。(奇遇)

語り手はまず、イタリアの夜は「荘麗」で「気味の
佳い、きらびやかな、うつくしい」ものだと全体の印
象を述べる。そして、その夜の光景を織りなすものと
して、「照りわた」る「月」、「きらつく」星、「黄ば
む」ほど月に照らされた「地面」に映る「物の影」と
具体物を次々と挙げていく。注目点は変化していくも
のの、語り手の視界一杯に夜景が広がっている状態だ
と考えられる。よつて、(7)も(4)(6)と同様に捉えられる。

次の(8)は否定形ではあるが、初稿・改稿ともにスル
形式の例である。「めぐりあひ」「奇遇」の例で、(5)の
前半部にあたる。

(8) a. 面貌を見識つてゐればゐるほど、浮びに

く、て、其印象が判然しない、憶出せても目
に見えない……(めぐりあひ)

b. 面相を見識つてゐれば居るほど、浮び難く
て、其印象が判然しない、憶出せても目に見
えない……(奇遇)

婦人の顔が「見えない」、すなわち「印象が判然しな
い」のは、「目を閉ぢ」る前である。つまり、ここでは
まだ婦人と男が駆け去つた方に目をやつたままの状態
だと考えられる。視界の転換は生じておらず、初稿の
スル形式が改稿でもそのまま保たれている。

以上のように、改稿で「見えた／見える」どちらの
語形をとるかは、語り手の視界の転換の有無が条件に
なっていると考えられる。すなわち、視界が転換して
いる場合は初稿の「見えた」は改稿でも保持される。
一方、語り手の視界がひとところにとどまっている場
合は、改稿に際して「見える」に改変されているので
ある。

四 他の語句からの変更

太田(二〇〇〇)は、「あひゞき」初稿・改稿の語彙(自立語)を計量的に比較し、それぞれを構成する語彙の違いを明らかにした。太田は動詞に見られる改稿の特徴について次のように述べている。

動詞では、旧稿で使っていた動詞の半分近くも削除され、その削除した語の約半分しか添加していない。具体的には旧稿の語を添削して別語にするのだが、新しい語は半数で残る半数は他でも用いていた同じ語を新稿で繰り返し用いているということがある。(二二八頁)

つまり、初稿に比べて改稿では同じ語が繰り返し用いられる傾向にあるというのである。

「見えた／見える」についても同様のことが観察できる。すなわち、初稿では他の語句「見る」を含む複合語や、「た」以外の助動詞が接続しているもの、あるいは全くの別語であった部分が、改稿で「見えた／見える」になっているものがあるのである。

本節では、こうした例について見ていく。ただし、

前節のように文末同士で対応しているところに限るのではなく、初稿または改稿のどちらか一方が文末であれば取り上げることにする。他の語句から「見えた／見える」に変更されたのは、次の五箇所である。

初稿 シタ形式 改稿 見える ……四箇所

初稿 シタ形式 改稿 見えた ……一箇所

改稿で「見えた／見える」に変更された部分で、初稿がスル形式であった例はない。

「見える」になった例から検討していこう。(9)～(12)がそれにあたる。(9)(10)は「あひゞき」の例、(11)(12)は「めぐりあひ」「奇遇」の例である。

(9)では、林の中でひと寝入りしていた語り手が「目を覚まして見」たときの、林の中の様子が描かれており、初稿の「見渡された」が、改稿では「見える」となっている。

(9) a. 何ん時ばかり眠ッてゐたか、ハツキリしないが、兎に角暫くして目を覚まして見ると、林の中は日の光りが到らぬ隅もなく、うれしそうに騒ぐ木の葉を漏れて、はなやかに晴れ

た蒼空あおぞらがまるで火花でも散らしたやうに、鮮かに見渡された。(あひゞき)

b. 何位どくらゐ眠つてゐたか判然しないが、兎に角しほ久らくして眼を覚して見ると、林の中ぢゆうには一杯日が照つてゐて、何方どちらを向いても、嬉しさうに騒ぐ木の葉を透して蒼空が華やかに火花でも散らしたやうになつて見える。(あひゞき)

語り手の視界一杯に、木の葉の隙間から漏れる日光と、その隙間から覗く「蒼空」とが広がっている。このことは、改稿で「何方を向いても」という文言が加えられることで一層鮮明になつてゐる。つまり、(3)や(5)に見られたような視界の転換が生じているとは言えないのである。

(10) は「あひゞき」の冒頭に近い部分で、初稿の「見られた」が改稿で「見える」となつてゐる。(9)と同じく「林の中」の描写であるが、こちらは雨に濡れた林の中の様子を描く。

(10) a. 照ると曇るとで、雨にじめつく林の中はやうすが間断なく移り変つた。或はそこに在り

とある物総て一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそぐととした幹は思ひがけずも白絹めく、やさしい光沢つやを帯び、地上に散り布いた、細かな、落ち葉は俄かに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭かじゆをかきむしつたやうな「ペアポロトニク」(類あひゞき)のみごとな莖、加之も熟え過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、再現もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。(あひゞき)

b. 雨に濡れた林の中の光景やうすが照ると曇るとで間断なく変つてゐるが、或時は其処に在るほどの物が一時に微笑でもしたやうに燦爛きらきらとなると、むらくと立た樺の細い幹がふと白絹しろまゆのやうな柔なやしい光沢つやを帯びて、其処らに落散つた葉が急に斑まだらに金色きんいろに光る。そこで頭の茸もじやく々したペアポロトニク類あひゞきの美しい長い莖ちゆうまでが最もう秋だけに熟え過ぎた葡萄ぶどうのやうに色づいて、際限はてしもなく纏まとれつ絡からみつして目前

に透すいて見える。(あひゞき)

「樺のほそぐ」とした幹「落ち葉」など語り手の目に入ってくるものが次々と描かれ、最後に「ペアポロトニク」の「みごとな莖」が「見られた」とつながる。語り手が目を留めるものは次々と変わっていくが、はじめに「林の中のやうすが(中略)移り変つた」とあることに注目したい。樺の幹、落ち葉、ペアポロトニクの莖、いずれも「林の中」の一部である。語り手は「林の中のやうす」を詳しく描いているに過ぎず、視界が切り替わっているとは言い難い。

「あひゞき」の例ではどちらにも、語り手の視界は転換したとは言い難く、むしろひとつとどこかにとどまった状態である。そして、初稿のシタ形式は改稿で「見える」というスル形式に改変されている。前節で見たのと同様の現象が、ここにも見られるのである。

「めぐりあひ」「奇遇」ではどうだろうか。(11)は冒頭近く、語り手が女性と二度目の邂逅を経験する「一構の荘館」について、自身の記憶を辿りながら語り始めた部分である。初稿の「思はれた」が、改稿で「見え

る」に変更されている。

(11) a. 此丘の頂いただきに一構ひとかまへの荘館やしき、と云つた所が住

み棄てた母屋おもや一棟ひとむねと園その一区の外何も無かつたが、それが有つた。自分が此荘館やしきの側わきを通るは大抵ゆふやけの真熾まぢかりの頃で有つたが、今でも憶ひ出す、いつも此家このうちの窓をびつたり釘付けにした所が日向ひなたぼりに出た盲目めしひの老人のやうに思はれた、(めぐりあひ)

b. 此丘このかみの上に一構ひとかまへの邸やしき、といつた所が、住棄てた母屋おもや一棟ひとむねと園そのの外何もないが、邸やしきがある。その側そばを通るのは大抵夕栄ゆふばえの熾まかりの頃であつたが、今でも憶ひ出す、いつも此家このうちの窓をびつたり釘附くわにした所は盲目めくらの老人ひなたが日向ひなたぼりでもしてゐるやうに見える。(奇遇)

「一構の荘館」は「それ」「此荘館」「此家」というように指示詞を用いて繰り返されており、語り手の脳裏にはずつと「荘館」の様子が浮かんでいることが読み取れる。この部分でも語り手の視界はひとつとどこかにとどまっているということになる。

(12)は、語り手が「荘館」の方へ歩いて行く場面である。初稿の「見えだした」は改稿で「見える」へと変えられている。

(12) a. 荘館やしもの方へと歩を移した時は、もウ日も大分たけてゐた(時計を見れば十二時)。緩々ゆるく歩いて往つた。ソレ、いよ／＼岡の上に低い家居いけが見えだした……胸がまた踊りだした。(めぐりあひ)

b. 最う大分日が長けてから(時計を視れば十二時であつたが)、邸やしよの方角へ向いて、緩々ゆるく行くと、廳むかて岡の上に低い家が見える……胸がまた踊出した。(奇遇)

初稿の「見えだした」を含む文が「ソレ」と確認を促す感動詞で始まっていること、そして、「見えだした」(初稿)あるいは「見える」(改稿)の直後に「胸がまた踊りだした／踊出した」とあることに注目したい。語り手は期待をもって、「荘館／邸」の方を注視している。始めは語り手には館が見えていないが、館がわずれ視界に入るとは予期されている。

そのように考えると、(12)の例は、(3)や(5)と同列には扱えない。(3)では「道筋」↓「林端」↓「(野を隔てた)遠方」というように視界に入る光景は継起的に次のものへと変化していた。(5)では、目を閉じて今まで見えていなかった婦人の顔を思い出すというように、視界の転換が如実である。それに比べて(12)の場合は視界に入るものが予期されていて、視界が継的に展開していくというよりむしろ、予期した光景と実現した光景とは連続するものとして語り手にひとまとめに捉えられている。視界がひとところにとどまっているとまで断ずることは難しいが、それに近い状態であると考える。

「めぐりあひ」の例でも、「あひゞき」と同じく、語り手の視界は転換というより固定に近い。「めぐりあひ」「奇遇」に見られる現象も、前節と同様だと言えよう。

次に、初稿のシタ形式が改稿で「見えた」に変えられたている一例、すなわちシタ形式が保持された場合を見てみよう。(13)は「あひゞき」の例で、(6)の一つ前

の文にあたる(6)で検討した語に波線を付しておく。

(13) a. この少女なか／＼の美人で、象牙をも欺む

く色白の額際で巾の狭い抹額を締めてゐたが、その下から美しい鶉色で、加之も白く光る濃い頭髮を叮嚀に梳したのがこぼれ出て、二ツの半円を描いて、左右に別れてゐた。顔の他の部分は日に焼けてはゐるが、薄皮だけに却て見所が有つた。眼ざしは分らなかつた、

——始終下目のみ使つてゐたからで、シカシその代り秀でた細眉と長ひ睫毛とは明かに見られた。睫毛はうるんでゐて、旁々の頬にも亦蒼ざめた唇へかけて、涙の伝つた痕が夕日にはえて、アリ／＼と見えた。総じて首付が愛らしく、鼻がすこし大く円すぎたが、それすら左のみ眼障りにはならなかつた程で。(あひゞき)

b. なか／＼の器量好で、象牙のやうな色白の額際で幅の狭い緋の片巾を巻いて、その下から美しい灰色の白つばい濃い髪の毛の叮嚀に

梳したのを少し見せて、二ツの半円を描かせて、左右に分けてゐる。顔の他の部分は日を受けて黄ろい点をほんのりと見せてゐたが、こんな色は薄皮の者でなければ見られぬもので。伏目になつて居たから、眼は見えなかつたが、その代り秀でた細い眉と長い睫毛は判然見えた。睫毛は濡んでゐて、片々の頬にも蒼ざめた唇へ掛けて涙の伝つた痕が夕日を受けてきら／＼と見える。総じて首付が可愛らしい。鼻が少し大きく円すぎたが、それすら左ほど目障りにもならぬ。(あひゞき)

改稿でスル形式「見える」へ改変された(6)との違いは、それぞれの該当部分で語り手が目しているものと、その直前で目しているものとの差異の度合いである。(6)で述べたように、語り手はまず少女の姿全体を眺めてから、顔や表情に注目する。「見所が有つた」までが全体、「眼ざしは」以降がクローズアップにあたる(改稿では「見られぬもので」までと「伏目になつて」以降)。(6)では、直前に睫毛を見、該当

部分では睫毛から頬にかけての涙（の跡）を見ており、見ているものに連続性があるのに対して、(13)では、直前に少女の顔とその肌の色を、該当部分で睫毛を見てゐる。(6)と比較して、見ているものの差異がはっきりしているのである。このような違いが、(13)ではシタ形式の保持を、続く(6)ではスル形式への改変を促したと考えられる。

以上見てきたように、本節の例も前節で観察したものとはほぼ同様の傾向を示している。視界の転換の有無が「見えた／見える」のテンス形式の保持または改変の条件になるといふ仮説はここでも支持される。

五 「見える」に関するテンス形式の改変が意味するもの

前節まで、語り手の視界が転換するか否かが、初稿の「見えた」が保持されるか「見える」に改変されるかの条件であることを観察してきた。

小説の地の文におけるテンス形式の対立については、工藤（一九九五）の研究がある。工藤は三人称小

説の地の文を「（かたり）のテキスト」の典型とし、そこにおいてしばしば指摘されるテンス形式の交替現象を考えるには、次の三点への留意が必要であるとする（一六九—一七三頁）。

第一に、「（かたり）」の主導時制形式は、基本的に、過去形」であつて、その意味・機能は「（叙事詩的時間）の提示」にあるということ。第二に、「非過去形と過去形が、時間的意味の相違（相対的テンス）」として対立している場合があつて、常に、交替現象が起るわけではない」こと。つまり、物語の出来事時を基準軸とする（相対的テンス）」としてテンス形式が対立している場合は、テンス形式を入れ換えることができないということ。第三に、「（かたり）」のテキストでのテンス形式は、「基本的に、テキスト（内部）」の出来事間の時間関係、つまりは、「タクシス」関係の提示の機能をもつ」こと。

その上で、テンス形式の交替現象について次のように指摘する。

そして、以上の三点を認めた上で、なお、タクシ

ス関係を変えない過去形と非過去形の交替現象があるとするれば、これは、基本的に、『視点』の相違をもたらしめてくるであろう。(一七三頁)

本稿で注目した、「見えた／見える」に関わるテンス形式は、〈相対的テンス〉として対立し、時間的先後関係を表す形式として機能しているのだろうか。それとも、タクシス関係を提示せぬテンス形式として、『視点』の相違』を表しているのだろうか。

テンス形式が保持されたものから見ていこう。シタ形式が保持されたのは(3)(5)(13)である。

(3)では、婦人と男とが「駈出し」、語り手はしばらく「道筋」を歩き、そののち「林端へと出たところに」二人の姿を遠くに認める、という出来事が描かれる。これらの出来事は、物語内の時間の進行に従って生じたものとして時間順に提示されている。しかし、「見えた」を「見える」とした場合、時間の進行は「駈出し」たところで止まり、その時点で予測される未来の出来事として「林端へと出たところに」二人の姿が「見える」こと」が提示される文になってしまう。出来事時以後

のことを(予測的に)表す文になってしまうのである。つまり、(3)の「見えた」はタクシス関係を示すテンス形式として機能している。

(5)の場合、仮に「見える」としてもタクシス関係が変わるわけではない。しかし、「見える」にすると、文の始めの「スルト」とかみ合わず、ちぐはぐな印象を与える。「すると」は、前後の出来事が継起的に生じていることを示す接続詞である。一方、後述するように、タクシス関係を表さないスル形式には作中人物の知覚性を前面化する働きがある。「見える」とスル形式にした場合、文の始めと終わりとで前面化されることがらに、くいちがいが生じるのである。試しに「スルト」を除いた文を想定すると、スル形式でも違和感なく理解できよう。シタ形式「見えた」は、接続詞「スルト」があることよって保持されているのである。

(13)については、後述する。また、スル形式が保持された(8)についても、(13)と合わせて後述する。

テンス形式が変更され、シタ形式がスル形式になったのは、(4)(6)(7)(9)〜(12)である。結論から言うと、テン

ス形式が変えられたことよって、出来事間の時間的
先後関係に変更は生じていない。例えば(4)では、「見え
た」であろうと「見える」であろうと、その後に続く
〈灌木の間へ入る〉という出来事との時間的先後関係は
変化しない。すなわち、初稿の「見えた」と改稿の「見
える」とは、相対的テンスとして対立しているわけでは
ない。

以上見てきたように(8)(13)の検討は保留している
が、改稿でシタ形式が保持された部分には、「変えら
れない理由」がある。それは、スル形式にすると出来
事間の継起性が失われたり弱まったりするということ
である。シタ形式の保持が、視界の転換が如実に読み
取れる箇所に観察されたのは、視界の転換が起る部
分は総じて複数の出来事が継起的に展開している部分
だからである。

逆に言えば、視界の転換が認められない所は、継起
性や時間的前進性に乏しいということである。そこで
のテンス形式の対立は、相対的テンスを示さない。そ
して、そうした部分が「見える」に改変されている。

ということは、これらの改変は「視点」に関する改変
だということになる。

それでは、工藤の言う「『視点』の相違」とは何だろ
うか。先に述べたように、工藤は三人称小説を（かた
り）の典型としているが、その中で、作中人物の内的
独白にあたる部分に過去形が用いられ、三人称の（か
たり）に近くなっている話法を「描述話法 (narrated
monologue、語りとしての独白)」と呼び、次のように
述べている。

意識世界の出来事の提示部分においては、〈内的独
白〉としての本来的現在形を、過去形に変えるとい
う文体的技巧がみられる。このような、過去形
の使用による内的意識の提示を（描述話法
(narrated monologue)と呼ぶ)とすれば、こ
こでは、非過去形と過去形とは、〈視点〉の相違と
して対立すると言えよう。非過去形を使用すれば、
意識の直接再現性Ⅱ内的視点だが、過去形を使用
すれば、作中人物の意識の対象化が起こって、内
的視点そのものではなくなる。(二〇四頁)

「あひゞき」「めぐりあひ」はどちらも作中人物「自分」が語る形式をとっており、その文体は典型的な「かたまり」というよりも、工藤の言う「描述語法」に近い。引用した指摘に沿えば、「あひゞき」「めぐりあひ」における「見えた」から「見える」への改変（他語句から「見える」への改変も含む）は、次のようにまとめることができる。

「見えた」：語り手の〈見える〉という知覚が対象化され、語り手自身の意識（や言葉）からは距離を置いて表される。

← 「見える」：語り手の〈見える〉という知覚が語り手自身の意識の直接的再現として表される。

上記の様な改変が行われるか否かは、該当部分の前後の文に配置される複数の出来事が継起的に描かれているか否かによる。「見える」という知覚動詞に関する限り、それは、語り手の視界が転換する（継起性を持っている）か、視界がひとところにとどまっている

（継起性を持たない）か、という違いとして表面化している。

以上を踏まえて、改めて検討したい用例がある。先に保留した(8)と(13)である。

(8)の場合、初稿においても「印象が判然しない」「目に見えない」「全体が成立たない」とスル形式が連続していることが特徴である。ここは語り手の内的意識が提示されている部分であり、初稿の段階ですでにスル形式が用いられていた。改稿もスル形式を保持することで、語り手の意識をそのまま提示する語り方を保とうとしたと考えられる。

それでは、「見られた」が「見えた」となった(13)の場合は、なぜシタ形式が保持されたのだろうか。ここは、仮にスル形式にしてもタクシス関係には影響しない。つまり、スル形式にして語り手の知覚が前面化されてもよい部分である。改稿で語り手の内的意識をそのまま提示しようとしていることは、(13)の後文の「見える」以降、改稿では「可愛らしい」「目障りにもならぬ」とスル形式が連続することからも分かる。にもかかわらず、

(13)でシタ形式が保持された理由は何だろうか。

先にも述べたように、この(13)は、姿全体から顔や表情へと描写対象がクローズアップされた、その始めの一文にあたる。もしこの一文目をスル形式にしてしまうと、クローズアップに切り替わると同時に語り手の知覚が前面化されることになる。つまり、描写対象の範囲が大きく変化したことが明示されぬまま、語り手の「内的視点」が持ち出されることになってしまう。それを避けるために、この始めの一文はシタ形式である必要があったのである。

出来事が継起的に展開し、語り手の視界が転換してるときは、それを示すために「見えた」を改稿でも残す。一方、出来事に時間的前進性がなく、語り手の視界が転換しないときは、語り手の〈見える〉という知覚が前面化されるような語り方へ改変する。知覚動詞「見える」に関する限り、四迷は読み手を語り手の視界(の中)に誘導する、あるいは一体化させる方向に改変を行ったと言えよう。⁵⁾

六 おわりに

本稿は動詞「見える」に注目し、そのテンス形式が改稿で保持あるいは改変されるとき条件として、語り手の視界の転換の有無があることを示した。また、スル形式「見える」への改変は、語り手の知覚を前面化し、読者を語り手の内的視点に誘導する働きのあることを指摘した。

最後に、本稿の結論について数値の補足を行ないたい。次は、初稿と改稿の文末同士で対応する語が同語の場合について、テンス形式の対応をまとめたものである。

テンス形式を保持

シタ形式 ↓ シタ形式 ……六六箇所

スル形式 ↓ スル形式 ……一三箇所

テンス形式を改変

シタ形式 ↓ スル形式 ……四二箇所

スル形式 ↓ シタ形式 ……〇箇所

初稿と改稿で文末に同語を用いている箇所については、スル形式からシタ形式へ変えられた例がない。改稿で

スル形式を用いなかった理由については個別の検討が必要だが、それでもシタ形式からスル形式になったものが四二箇所あることを考えると、これは偶然の結果とは考えにくい。

文脈の許す限りスル形式を持ち込むことで、読者を語り手の内的視点に誘導する。そうした改変を、四迷はかなり自覚的に行なったように思われるのである。

たしかに、改稿の文体は初稿のような反響をもたらさなかった。芸術性の高さにおいて初稿に価値を認める論にも首肯できる点は少なくない。それでも稿者が改稿にこだわるのは、文学史的影響の少なさにもかかわらず、多くの研究者が改稿の方に「こなれた日本語」を見ているからである。どのようなプロセスを経て「こなれた日本語」の文章は生み出されたのか。四迷の行った改変は、近代日本語における文体形成史の過程を写し取っているように思えてならないのである。

主要参考文献

太田絃子(二〇〇〇)『二葉亭四迷「あひゞき」の語彙研究――

『あひゞき』はどのように改訳されたか――』和泉書院

木坂基(一九七六)『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房

木村崇(一九九七)『二葉亭が用いたツルゲーネフ作品集』『文学』(石波書店) 八一―

工藤真由美(一九九五)『アスペクト・テンス体系とテキスト――現代日本語の時間の表現――』ひつじ書房

コックリル浩子(二〇〇九)『二葉亭四迷の翻訳における「純粋言語」die reine Spracheとしての「た」形』第五回国際コンファレンス「多文化主義と社会的正義」(於・立命館大学、三月二二・二三日)ペーパー(以下より入手…
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/2008/6/Cockerrill_paper_Japanese.pdf)

佐藤清郎(一九九五)『二葉亭四迷研究』有精堂出版

杉山康彦(一九七九)『長谷川二葉亭における言文一致』『坪内逍遙・二葉亭四迷(日本文学研究資料叢書)』有精堂

深澤愛(二〇一一)『「あひゞき」『めぐりあひ(奇遇)』におけるアスペクト形式の改変――初訳と改訳との比較による考察――』

『東アジア日本語教育・日本文化研究』第一四輯
山本正秀(一九六五)『近代文体発生の史的研究』岩波書店

付記 本稿は、第九七回国語語彙史研究会(二〇一一年四月二三日、於・近畿大学)で発表した内容に基づく。会場で多くの方からご教示いただいた。記して感謝します。

1 以下、「あひゞき」「めぐりあひ(奇遇)」の引用は、「二葉亭四迷全集」第二卷(一九八五年、筑摩書房)による。なお、漢字の字体は現行のものにした。

2 もとより、改稿の方に認められるこうした特徴は、ここに取上げられた二人以前から、多くの研究者たちが指摘してきたことである。

3 本稿では、地の文における、句点、リーダ(……)、ダツシユ(——)、!、?の直前を「文末」とした。なお、「あひゞき」改稿、「めぐりあひ」、「奇遇」には白ゴマ点が用いられている。これについては、次の太田(二〇〇〇)の指摘に鑑みて、文末とはみなさないことにした。

『あひゞき』新稿の白抜きごま点は旧稿の句点九・読点一一・句読点無し一と対応している。新稿で白抜きごま点になった箇所は、ロシア語の原典はピリオドでなくセミコロン「:」又はコロン「:」である。(中略)このように『あひゞき』新稿では、内容による切れの大小を3種の句読点を使用して明白にしている。(二四〇—一頁)

4 以下、文脈の説明で本文を引用する際には、特に必要のない限り初稿で代表させる。言及のない限り改稿でも基本的に同様のこと観察されている。

5 コックリル(二〇〇九)は、「めぐりあひ」の「てゐた」が「奇遇」で「てゐる」となったことについて、「てゐた」の中の過去時制の意味を犠牲にして、ロシア語の完了相と対になる「不完了相(アスペクト)」を強調したことになるのではないか」という。コックリルが「奇遇」にも原文への忠実さを認めるゆ

えんである。ただし、それは「語り手が体験する庭の美しさを「いま」「ここで」まざまざと体験しているように感じさせ」るためであったとする。